

鳴門教育大学 教職大学院に学ぶ

現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

》 教員を巻き込むことのできる知

三木野さんは、これまでの教員生活で、高校3年生を担当することが多く、進路指導担当になることがたびたびありました。かつての進路指導は、3年生半年間のチャレンジでした。自分ではベストを尽くして指導をしたと思っても、中にはゴールデンウィーク明けに就職先を退職したり、大学を半年で中途退学したりする生徒がいました。

省察するうちに、入学から卒業までを見据え、長いスパンで「どういった青年を育てるか」を考える必要があると気付いたそうです。3年生の担任だけではな



三木野 博之 先生

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース修了

CASE 8 :
「待つこと」の大切さ



く、学校全体の教職員のマンパワーが必要だと痛感しました。

周囲の教職員を巻き込むための知として、経験知のみでは説得力に欠けると思いました。今までの経験と理論を融合させることが肝要であると思い、鳴門教育大学教職大学院に入学しました。

》 これまでの実践の相対化

三木野さんの専門分野は社会科学（経済）です。そのため、大学院の学びでは、教育原論に関する授業が新鮮だったそうです。教育に関する歴史、先行研究、先進的な実践から教育の本質と目的を理解し、自らの教育観や実習校における教育課題への向き合い方を構築することができました。鳴門教育大学教職大学院の授業は、自分のもつエピソードと理論を重ね合わせられたと実感しました。



また、グループゼミが有意義だったとも話してくれました。中学校教員である異校種のゼミ仲間と語り、指導教員から指導を受けると、自分の実践が整理でき、相対化できる感覚が生まれたのだそうです。

学校臨床において、これまでの学校制度や学校文化では当たり前だと思ったことを別の視点で捉えることにより、いじめや不登校の児童生徒の内面に向き合うことの重要性を改めて感じました。実習の中でもこの視点は生かされています。

ワーク・ライフ・バランス

三木野さんの実践のキーワードの一つに「ワーク・ライフ・バランス」があります。「仕事と生活の調和」という意味のこの言葉は、進路指導にも大きく関係しています。高校の授業では「自己理解と社会との適応」という形で展開されます。

つまり、自己理解に基づいた社会、「仕事」（社会・職業理解）と、趣味や学習といった「仕事以外の生活」

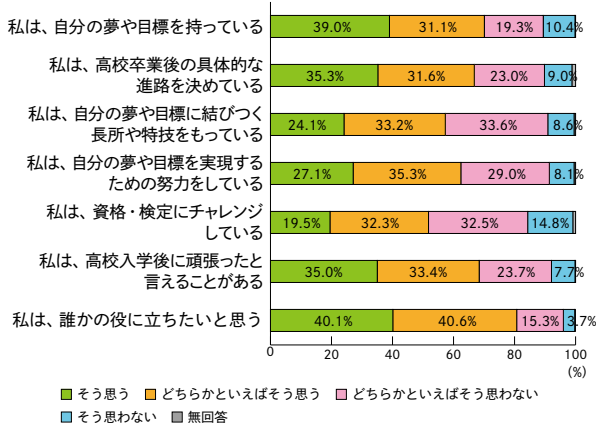
三木野先生の研究概要

日常的なキャリア教育 自分軸と社会軸

Research

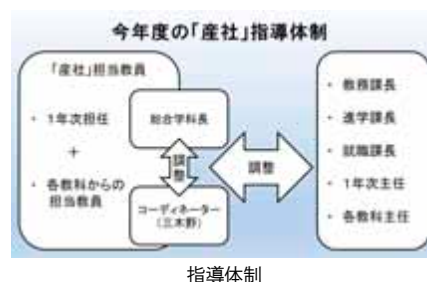
学校全体で進める効果的なキャリア教育の在り方について検証していくため、生徒・教員を対象とした意識調査や聴き取り等を行うことで、本校の課題と研究の方向性が明確化された。先行研究や先進事例の調査も同時進行で実施した。

進路実現に向けた取組に関する意識調査 (2015年11月) 抜粋



Plan

総合学科の根幹でありキャリア教育中心科目と位置付けられる「産社」*を中心に、キャリア教育推進のためのカリキュラム開発及び指導体制の構築に向けた取組を進めていくことにした。



指導体制

との調和をとり、その両方を充実させる働き方・生き方を見つけるといえるものです。自己理解には、他者から見た自分による気付きも含まれています。

授業の中で、自分理解と社会・職業理解を進めるために、履歴書を書くワークを取り入れたことがありますが、改めて、自分の経歴を丁寧に振り返り、自分を的確にPRすることのむずかしさを生徒は実感したようです。

》 授業から学んだ自己理解

キャリア教育の一環として実施した国際理解の授業に、難民の人たちに子ども服を送る活動があります。

活動を通じて、それぞれの生徒が、社会に向けての自分の適応特性に気が付きます。例えば、創造的な能力を生かして芸術的な活動であるポスター制作に取り組む生徒は、小人数で緻密な作業を好みます。また、人間関係調整能力を生かして社会的な活動である子ども服の回収箱を制作し、近隣の幼稚園に設置を依頼する

生徒たちは、多人数で関わる協働作業を好みます。

このような自己理解、社会・職業理解が組み込まれた活動をカリキュラムの中に位置付けることにより、キャリア教育をより充実したものになりたいと思っています。

》 「待つこと」の大切さ

今まで、目の前の生徒の明日のことばかりを考えてきました。「この子たちをよくするために」という思いで自分の責任の中で生徒を育ててきました。それは先走り、自立の道の石ころを先に拾ってしまうことにつながってしまうことに気が付きました。「待つこと」に大切さと共にむずかしさを感じます。

これからは、周りの先生の宝を生かしながら、生徒たちの将来を見据えた長期的な展望に立ち、自立できる支援の在り方を模索して行きたいと教師としての自分軸と社会軸の提示で締めくくった三木野さんでした。

自立した社会人を育む組織的・計画的な教育活動の展開

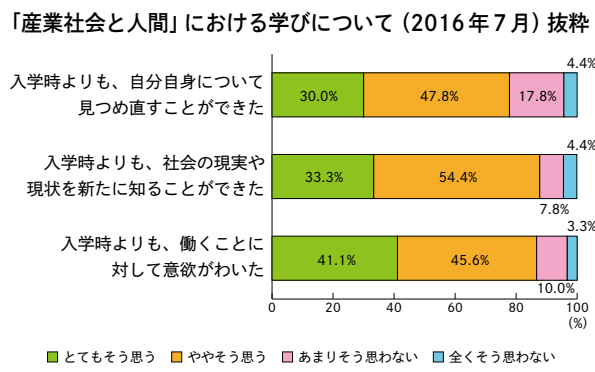
Do

コーディネーター的な立場から指導計画等を立案し、「産社」*の授業を展開した。自己理解と社会・職業理解を相互に行き来しながら、今の自分に何が必要なのか、何をなすべきかを考えさせることに主眼を置いた。



Check・Action

意識調査等からは、「産社」*の意図は生徒に十分伝わっていると考えられる。一方、将来の不安を感じている生徒が少なからず存在していることから、ガイダンス機能を強化する取組を進めている。本校生徒が「自立した社会人」としてしっかり人生を歩んでいけるよう組織的・計画的な教育活動の展開を今後も進めていく。



*「産社」=総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」

「教員、人間としての器をより一層大きくする！」

教える自信と学ぶ謙虚さを育てる鳴教の教職大学院へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、実践を省察し、学び続ける意欲を持ち続けているものです。より高い“教師力”を身に付けることをめざすなら、理論と実践の融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次の学校課題アセスメント、2年次のフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院が目指すのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資する、学校や地域で指導力を発揮できる人材を育成するには、教職大学院を活用ください。



鳴門教育大学教職大学院への期待

徳島県教育委員会教育長 美馬 持仁

本県におきましては、鳴門教育大学に大学院学校教育研究科が設置された昭和59年から、延べ1300名を超える現職教員を派遣し、鳴門教育大学と連携しながら、本県の教員の資質向上と指導力の充実を図ってきました。特にリーダー教員の育成を目指し平成20年に設置された教職大学院への派遣修了者は、その学びを生かし学校運営の核として活躍しております。

今回実践報告が掲載された三木野教諭が、

教職大学院で学んだキャリア教育は、子供たちが人生を主体的に切り拓いていくための重要な学びであることから、本県でも積極的に推進しております。ぜひ、三木野教諭にはその成果を勤務校に止まることなく、広く県内に還元していただきたいと思っております。

最後に、鳴門教育大学教職大学院は、平成29年度に10年目を迎えます。今後更に取組を充実・発展させ、本県教育の振興に大きく貢献して下さることを期待しております。



「次代を担う人づくり」をめざして

徳島県立城西高等学校長 安永 潔

本校総合学科は、昨年度で20年目を迎えました。この節目を機に、これからの時代を見据えた総合学科の在り方、教育の方向性（人づくり）を見定めなければなりません。

こうした中、三木野教諭が鳴門教育大学教職大学院で「産業社会と人間」を中心とした「系統的なキャリア教育の在り方」を実践課題とし、これからの社会や生徒の実態を考慮した上で効果的なキャリア教育について実践

研究していることは、大変意義深いものです。総合学科長や進路課長等と調整を図る体制を構築したことで教員間の意見交流も頻繁になり、職員の意識と指導技術を高めました。また、生徒たちも自己の内面を見つめ、社会の中における自己の在り方や将来について考え始めるようになりました。理論と実践が融合した研究の成果は、本県総合学科の未来に生かされるものであると期待しております。

◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス

電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp

鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>



大学院での学びを活かす

川上 り彩 さん

〔高松市立東植田小学校 教頭〕

大学院修了後、早くも6年が経ちました。現在、私は高松市立東植田小学校で、教頭兼6年生の学級担任として充実した毎日を送っています。大学院での学びを改めて振り返ってみると、その後の仕事に直接活かされたことと、仕事をする上で間接的な支えとなったことがあるように思います。

直接活かすことができたのは、「不登校の早期発見・早期対応と校内支援体制の確立」をテーマに、当時勤務していた中学校の協力の下取り組んだ実践研究です。大学院修了後勤務した香川県教育委員会義務教育課では、この実践研究をもとに、「前年度10日以上」、「月3日以上」欠席した生徒に注意するといった具体的な数値を提示しながら、不登校対策の推進に取り組むことができました。

また、間接的な支えとなったのが、大学院の相談室での親との面接や小学校での異校種実習です。面接を通して保護者の思いにふれ、中学校とは異なる小学校の学級担任のたいへんさを間近に感じた経験は、わたしのものの見方や考え方を変えるとともに、現在、小学校で仕事をする上で大切な指針となっています。

(平成20年度1期学校臨床実践コース修了)



関わる力、つながる力

曾我部 修司 さん

〔三好市立吾橋小学校 教頭〕

「関わる、つながる」ということを学問として初めて学んだのが、鳴門教育大学教職大学院でした。事例検討やカウンセリング技法など、実践的かつ理論的な幅広い授業を通して、人と関わるとはどういうことなのか、つながるためにはどういったプロセスが必要なのかということが段々と分かってきました。さらに、置籍校での試行錯誤は、教師としての省察力を鍛えることにもつながりました。

私は現在、県西部の山あいにある全校児童8名(園児2名)の小規模校に勤務しています。地域は雄大な自然に囲まれ、長い歴史とともに多くの民謡が、脈々と受け継がれてきた魅力溢れる土地です。

地域と学校とをつなぐことで活性化を図ることが、私の大きな役割ですが、並行して小中連携(チェーンスクール)事業にも取り組んでいます。全教職員、地域の方々、さらに近隣校と手を携えて教育活動を進めることに非常にやりがいを感じています。

子どもたちには、地域の自然や文化と積極的に関わり、人とのつながりを深めていくことを通して、故郷に対する誇りをもった感性豊かな大人になってもらいたいと願っています。微力ですが、その一助となれるよう日々努力したいと思っています。

(平成20年度1期学校臨床実践コース修了)



右端が筆者

グローバルリーダー育成

川村 陽一 さん

〔静岡県立三島北高等学校 教諭
SGH推進室長〕

平成26年、文部科学省は三島北高校を含む全国56校をスーパーグローバルハイスクール「SGH」に指定しました。グローバルリーダー育成に資する教育を推進することがねらいです。教員には(1)無限の可能性を持つ生徒の主体性を育て、(2)新しい学力観に基づいた授業改善への工夫をし、(3)多面的な評価方法を構築し、(4)キャリア教育に基づいた進路指導(スーパーグローバル大学「SGU」との連携)の実践が求められています。

本校は「水」をテーマに課題研究を実施し、①グローバルな視点で社会課題を考える力、②教科横断的な教養、③論理的・批判的思考力、④日本語や英語によるコミュニケーション能力、⑤主体的に活動するリーダーシップや協働的に取り組む課題解決力といった資質能力の育成を図っています。アクティブラーニングを取り入れ、国内外の水問題に取り組みます。ゴールは「英語によるポスターセッション」です。

鳴門教育大学大学院では、「リーダーシップを発揮できる生徒と主体的学習姿勢の育成」について研究を行いました。指定を受けた同年、大学院での学びと直結する本校へ赴任しました。

(平成24年度5期学校・学級経営コース修了)

～学び続ける修了生～



未来を切り拓く学び

有澤 拓也 さん

〔高知県教育委員会事務局人権教育課 指導主事〕

私は教職大学院修了後、高知県教育委員会事務局人権教育課の指導主事として新たなスタートを切りました。行政の仕事というのは、これまで学校現場でやってきた仕事とは大きく異なりますが、新たな課題や未知な問題に直面した際に、大学院で培われた分析力や思考力が大いに役立っていると実感しています。講義や置籍校での実習、そしてゼミでの議論を通して、様々な教育課題に対する考え方や行動に自分なりの基軸ができたことは、大学院での大きな収穫であり、鳴門で学ぶ機会を得られたことにとても感謝しています。

また、高知県では、生徒のよさや力を引き出す「開発的な生徒指導」を推進しています。これは、私の大学院での研究テーマであった、「生徒の『自分への信頼』と将来への『目的意識』の醸成に向けた教職員の組織的協働」で用いた理論や手法と多くの共通点があり、自分が事務局で担当している事業を通して、大学院での学びを現場に還元できることに喜びとやりがいを感じています。今後も大学院での学びをさらに深めるとともに、本県の教育のために尽力したいと考えています。

(平成25年度6期教職実践力高度化コース修了)



学びをつなぐ

山本 千明 さん

〔新居浜市立新居浜小学校 教諭〕

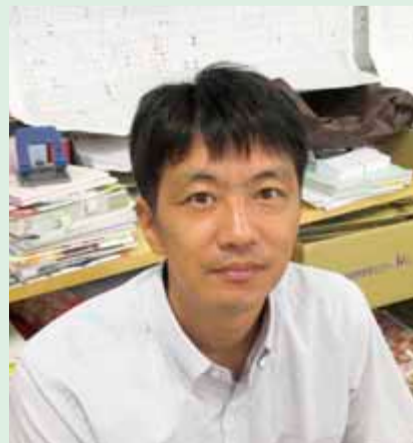
教職大学院での学びは、教員としての自らを振り返り、その先を考えるターニングポイントとなりました。

豊かな経験知と確かな学問知の融合の重要性。学校課題解決のための教職員の協働。児童の学びを幼小中高と連続的に捉えること等々。二年間のたくさんの学びや多様な人との出会いは、学校現場に戻った今、教室での子ども達との営みの中で、職員室での教職員との関わりの中で、悩み考える私に多くの示唆を与え、そして支えてくれています。

大学院修了後は、現任校に異動し、教務主任として、学校全体の教育活動が円滑に進むよう、カリキュラムマネジメントを行い、各主任との連携・調整を図っています。そして児童の学力向上のため、課題を焦点化し、教職員と共に取り組んでいるところです。また昨年度は、中学校区の研修会で、大学院で研究した「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」を紹介し、小中の先生方と共に学ぶことができました。

今後も大学院での学びをつなぎ、児童を取り巻く多様な人々と共に実践を重ね、学び続ける意欲と実践力を持ち続ける教師でありたいと思っています。

(平成25年度6期教職実践力高度化コース修了)



学び続ける 教員集団を目指して

小倉 整 さん

〔鈴鹿市立神戸中学校 教諭〕

教職大学院7期生として、鳴門で学んだ2年間は本当に有意義な時間でした。大学院での講義や演習・フィールドワークを通して、自分の仕事をこなすことに邁進していた自身の姿を見つめなおし、学校全体を俯瞰する目で見渡す視座を与えていただきました。

中でも2年目の学校課題フィールドワークにおいて、置籍校で組織づくりを行う過程で得た「教職員が協働し」「チーム学校」へと成長するまでの学校組織マネジメントの手法は、私にとって大きな財産となっています。

学校現場に戻った現在でも、その学びを活かし、学校全体への働きかけを意識して、担当である研修主任の役割に取り組んでいます。具体的には「教科部会を中心とした授業改善」を掲げてファシリテート・チームを作り、教科代表を中心とした教科部会運営と研修部を中心とした校内研修運営を教員集団が自発的にやる体制づくりを進めています。

日々、漸進的な授業改善の取組みの中で、学び続ける教員集団を目指して、学校全体が同じ目標をもって実践を重ねていく。「チーム学校」実現のために、これからも精進していきたいと考えています。

(平成26年度7期教職実践力高度化コース修了)